

二〇一四年度秋季企画展

「十五年戦争と早稲田」

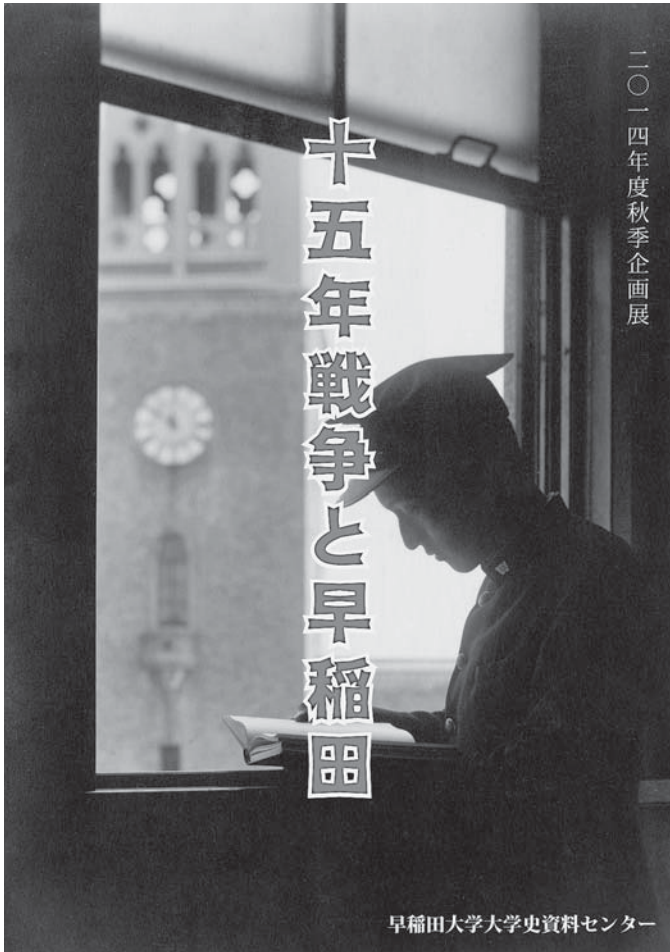
檜皮瑞樹

二〇一四年度秋季企画展では、「十五年戦争期の早稲田大学」をテーマとし、大学や学生の戦争への主体的な関わりや、敗戦後の学苑を扱った。二〇一二年度以来、秋季企画展では東京専門学校開校から旧制大学の大学と学生をテーマとして取り上げ、旧制大学期を、①開校から東京専門学校時代、②大正デモクラシー期（専門学校令下の早稲田大学）、③一九三〇年代から敗戦まで（大学令下の早稲田大学）として時期区分し、それぞれ「大隈重信と小野梓―建学の礎展」（二〇一二年度）、「『大正デモクラシー』期の早稲田―校旨制定一〇〇年」（二〇一三年度）と連続した企画を行ってきた。

二〇一四年は、敗戦七〇年を翌年に控えるだけでなく、集团的自衛権の閣議決定や中東地域での終りの見えない紛争などによって、あらためて「戦争」をめぐるさまざまな問題がクローズアップされた一年であった。このような社会情勢もあり、本企画展は予想以上に多くの方のご来場を得ることができ、また数々のメディアで取り上げられた。期間全体の入場者数は一、六六六名であり、『毎日新聞』（二〇一四年一〇月二二日付、東京夕刊）「Topics」『大学と戦争

展』、『読売新聞』（二〇一四年一〇月二日、朝刊）「終戦七〇年へ『戦争と大学』展」、『信濃毎日新聞』（二〇一四年一〇月六日、朝刊）「東京の信濃」などで紹介された。

以下、展示資料の一部や展示のコンセプト等について叙述することで、企画展の簡単な紹介にかえたい。



チラシ（表）

プロローグ

戦争とは非日常的な世界である。善良な一市民が、あるいは年端もいかない子どもが、時には銃を持って加害者となり、同時に被害者ともなる。現在も、空襲により足の踏み場もないほどに死体の散乱した罹災現場など、世界各地の戦場における凄惨な場面を、メディアを媒介として目にする機会は少なくない。

一方で、狂気とも呼ぶべき戦争の世界は、私たちの日常と完全に切断して存在するわけではない。狂気と日常とは背中合わせの関係にあり、戦争とは平穏な日常生活のすぐそこに在ることを忘れてはならない。

一九三〇年代から一九四五年までのいわゆる十五年戦争期、大学や学生は常に戦争や自らの死といったものを意識しながら、平穏な日常を過ごさねばならなかった。しかし、戦争との関係において、大学は単なる被害者という立場に安住することはできない。国家による統制と弾圧がいかに苛烈であったにせよ、大学が積極的に国策に追従したことは明らかであり、戦争遂行に果たした責任と、それに対する追及から免れることはできない。

一方、学生はどうであったろうか。戦前期において知識人の一翼を担っていた学生は、自らの使命感を強く意識し、学生時代から社会との関係を築いていた。時には、政治情勢に敏感に反応し、大学を含めた権力に対して異議申し立てを行なった。しかし、満州事変の勃発によって状況は一変する。排外熱と軍国主義の高揚のなかで、大学も学生も、次第に戦時体制へと突き進んでいくこととなった。思想弾圧が苛烈であればあるほど、その閉塞感からの逃避が戦争への熱狂を生み出したともいえる。

また、留学生、特に植民地出身の留学生にとって、戦争は自らの存在の不確かさを自覚させる契機となつ

た。彼らは、祖国のエリートとして、宗主国日本に留学した。宗主国による戦争への協力は、植民地出身学生に、祖国と宗主国との板挟みという苦痛と苦悩を強いることもあった。

一九四五年八月の敗戦によって、戦争が直ちに終結した訳ではない。敗戦によって、あらたに戦争処理と戦争に対する「清算」が始まったのである。占領下において、大学は自らの戦争責任と真摯に向き合い、その責任を果たしたといえるであろうか。

国家と大学・学生との関係は、現在においても形を変えて存在する。であればこそ、今、あらためて「学の独立」のありかたをあらためて考えてみることも必要ではなからうか。

I 閉塞と熱狂

一 学生運動と思想統制

一九二〇年代のデモクラシーの潮流は、学生をして政治参加と「変革」への情熱を惹起させた。普選運動・社会主義・政党内閣というキーワードに象徴される社会情勢に対して、大学も学生も敏感に反応した。「マルクス主義の牙城」と目された早稲田大学はその中心的存在でもあった。こうしたなかでおこった早慶戦切符事件は、大学に対する学生の不満を象徴する事件であった。

一方で、政府による思想弾圧、なかでも社会主義・共産主義運動に対する弾圧は徹底され、大学においても教員・学生の社会運動への参加に対する監視体制は強化された。一九二三年の佐野学・猪俣津南雄に対する強制的な研究室の搜索（研究室蹂躞事件）は、大学における学問も思想弾圧の対象となることを強烈に意識させた。一九三〇年代以

降は、治安当局による監視体制はより強化され、同時に大学もこれに対し過剰ともいえる対応を示した。学生に対する取り締まりは、彼らの政治活動にとどまらず、日常的な生活・風紀全般に及ぶこととなった。

このような時代を象徴するのが、大山事件¹⁾である。一九一七年の早稲田騒動で学苑を離れた大山都夫は、一九二一年に再び母校の教壇に立った。しかし、一九二六年一二月に大山が労働農民党中央執行委員長に就任すると、彼の辞職を要求する総長高田早苗以下の大学当局と、大山の留任を求める学生との対立が激化した。最後には、大学が大山を解職するというかたちで事件は決着したが、納得しない学生たちは大山の告別演説会を開催するなど、大学に対して激しく抵抗した。

けれども、実際上に於ては、彼等がその独立を擁護し、その活用を保全しようとする学問や、彼等がその自由を確保しようとする研究やは、今日では最早、支配階級が単に容認してゐるといふだけでなく、更らに積極的に歓迎もしくは支持してゐるものでさへある。それ故に、彼等が今尚ほ依然として繰り返してゐる学問の独立、研究の自由の主張は、最早著しく内容の空虚な、そして唱へ甲斐のない題目となつてゐるものである

大山都夫「早稲田の學徒に與ふ」

コラム 早慶戦切符事件

一九三〇年一〇月、大学による早慶戦チケットの配布方法をめぐる不正疑惑に端を発した早慶戦切符事件は、学生の自治的活動の要求や大学の保守化批判といった大規模な騒動へと拡大した。

大学は学生の動向を「危険的思想系統に属する一部の徒」による扇動であるとしたため、学生はこのような大

学の態度に猛反発した。一〇月二日以降はいくつかのクラスで同盟休校が実施され、一月に入っても構内でデモが実行されるなど混乱は拡大した。また、翌一九三一年にかけて校友有志による大学批判の声も起こった。多くの学生には、学問の自由を規制する政府当局に追従した学苑への不満が根強く存在したのであった。一連の学苑をめぐる騒動は、連日にわたって新聞紙上を賑わせた。

最後には、校友中野正剛の調停によって、一月一七日に騒動に一応の解決がなされたが、大学に対する学生・校友の不満が完全に解消したわけではなかった。

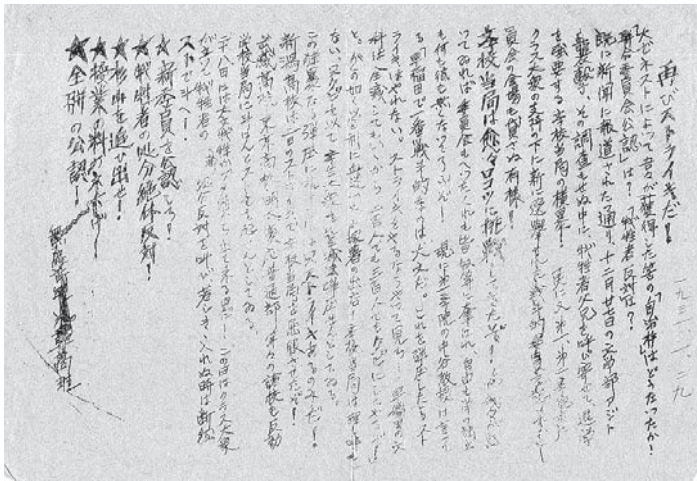
この騒動の勃発するゆゑんは深くかつ遠い。理事会というものが営業部のような外観を呈し、教授連中の権威があまりに失はれてゐた。この大騒動を起し二万の子弟を預かつてゐる学校側において、一人の教授も裸になつて学生に赤心を吐露する人もなければ、面を犯して理事会の反省を促すものもない。これは明白に学
校精神の腐敗である

中野正剛の感想『報知新聞』一九三〇年一月一四日

〔主な展示資料〕

- 大山郁夫解職に関する文書／一九二七年一月二六日（早稲田大学本部書類5―47―810）
- 田中穂積一派の罪悪を摘発して稲門校友並に学徒に訴ふ／早大在京校友有志団（岩瀬良二氏寄贈旧制第二高等学院関係資料21）

- ニュースNo.1、宣伝部ニュースNo.2／第二早高宣伝部発行、一九三〇年一〇月二四日・二六日（岩瀬良二氏寄贈旧制第二高等学院関係資料3・5）



早慶戦切符事件関係ビラ「再びストライキだ！」
(無産青年第二早高班、1931年1月29日)

○早慶戦切符事件に関する大学の説明文書（父兄保証人に向けて発行されたもの）／早稲田大学、一九三〇年一月三日
(佐久間和三郎氏寄贈旧制第一高等学院関係資料24)



「不良狩り」を続ける動き・要は早稲田の浄化」
(『早稲田大学新聞』、1938年6月15日)

○早慶戦切符事件関係ハガキ／委員より岩瀬良二宛、一九三〇年一〇月二七日・十一月四日・八日（岩瀬良二氏寄贈旧制第二高等学院関係資料9・14・16）

早慶戦切符事件当時、学生の間で交わされた葉書。「臨時明け後の指令が明五日早朝発表せらる、故明日午前十時迄に過日戸山ヶ原で集合した場所へ再度集合せられ度し」（二月四日付）、「アチト（亀井方）に午後二時半迄に集合せられたし」（二月八日付）などの記述がある。

○昭和五年度 学生運動資料綴（早慶戦切符事件関係）／第一早稲田高等学院、一九三〇年（第一早稲田高等学院資料62）
早慶戦切符事件のみならず、学生の政治運動への関わりに対して、大学は神経を尖らせていた。本資料は、日常的な学生の動向に関する情報収集など、大学の「積極的」な学生への監視活動を示す文書である。

○日支事変ニ依ル支那留學生ノ動搖及諸学校ノ対応措置ニ関スル調査／外務省文化事業部、一九三二年六月（三号館旧蔵資料40―6）

○日本共産党公判闘争代表陳述速記録（佐野学関係）／一九三二年七月二日～四日（三号館旧蔵資料59―17）

二 戦争への熱狂

一九三一年の満州事変、一九三七年の日中戦争開戦によって、大学でも戦争関連のイベントが立て続けに実施された。学生のサークル活動においても、軍事関連の内容が目立つようになる。

大学は「積極的」な国策への追従を一層加速させた。一九三六年二月には本学で初めての紀元節奉祝式が、同年一月には明治節の神宮参拝が行われ、以後敗戦まで毎年実施された。また、一九三七年二月には、戸塚球場において南京陥落祝賀式が挙行されるなど、キャンパス内も戦時色に染まることとなった。



「校庭に戦車と毒瓦斯 プールに駆逐艦」
 (『早稲田大学新聞』、1937年11月24日)

さらに、一九四〇年一月五日には、紀元二六〇〇年奉祝と創立六〇周年記念を兼ねた式典が開催された。田中穂積総長は、式典に先立ち伊勢神宮・橿原神宮・桃山御陵などを、学苑・校友会を代表して参拝した。式典は戸塚球場で実施され、戦歿将校及び皇軍の武運長久祈願の黙祷、や、詔書奉読が行なわれた。

また、記念歌「若き学徒の歌」(作曲池安延)の歌詞募集が学内で行なわれた。文学部教授窪田空穂・西条八十・日夏耿之助らによる審査の結果、政治経済学部三年生であった伊藤寛之の作品が選ばれた。

「主な展示資料」

- 若き学徒の歌 第一席入選とその他人選作品／一九四〇年(三号館旧蔵資料43—1)
- 紀元二六〇〇年を祝して学生から作詞を募った。第一席入選には伊藤寛之(ペンネームは中条愛星・政治経済学部三年、西條八十が主宰した『蠅人形』の同人でもあった)の作品が選ばれた。

○支那事変恤兵金関係第一回・支那事変恤兵金関係第二回／早稲田大学、一九三七年九月・一九三八年七月（三号館
旧蔵資料34―31・34）32）

○野外教練記録／第一早稲田高等学院、一九二八年・一九三三年（第一早稲田高等学院関係資料No.67・68）

○昭和十年度 満洲派遣学徒研究団 参加学生証（姜箕錫）／一九三五年（姜箕錫関係資料13）

○紀元節拳式に関する指示／早稲田大学、一九四一年二月一日（二〇〇三年度孫田良平氏寄贈資料）

II 戦時体制と早稲田

一九三七年の盧溝橋事件によって中国大陸での戦争が本格化した。これによって、社会全体が戦時体制へと向かっていった。一九三八年の国家総動員の制定、平和産業の軍事産業への転換など、総力戦体制へと移行する情勢に対して、もちろん大学も無縁ではなかった。早稲田大学においても、国策に順応したカリキュラムの再編や研究所の創設が矢継ぎ早に行なわれた。

一九三八年四月には「来るべき日滿支三国共存共栄の新事態に対応し、東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」するという理念を掲げた特設東亜専攻科が設置された。特設東亜専攻科は、在学生以外にも広く学生を受け入れ、植民地出身学生やアジアからの留学生もその対象であった。同時に、「聖戦目的達成の為め今後大陸経営上益々多くの人材を要する」ことを課題とする北・中支視察団派遣を計画、一九三八年二月から一九三九年一月にかけて、各学科代表一二名が現地派遣された。

また、一九三八年七月には東亜経済資料室が、一九四〇年一月には「内は政治並経済新体制に関して検討を行ひ、

以て国策の樹立遂行に寄与すると共に、外は東亜広域経済圏の確立に就いて研究を試み」ることを理念とした興亜経済研究所が設置されるなど、国家が掲げる理念と学問との癒着が顕著となつていった。

一方で大学は、津田左右吉や京口元吉など、自由主義的・反天皇制的とのレッテルを張られた教員に対して、辞職を要求するなど、学の独立からは大きく乖離する態度をとることとなつた。

私が責任ヲ負ツテヤメタ訳デハアリマセヌ。私自身ト致シマシテハ、是レモヤハリ学校ガ非常ニ窮地ニ陥ルト云フコトニ氣付キマシタモノデスカラ、ソレハ私トシテ忍ビナイコトデアリマスカラ、私自身ガ身ヲ引イタ方ガヨカラウ、斯ウ云フノデ学校ヲ辞任シタ

津田左右吉の証言（『現代史資料』42「思想統制」より）

戦時下の二人の総長——田中穂積と中野登美雄——



田中穂積

田中穂積（一八七六年二月～一九四四年八月）

長野県更級郡川柳村石川（現在の長野市篠ノ井）出身、松本中学校に入学するも肺ジストマのため退学、生家で療養しながら東京専門学校講義録で独学した。一八九五年一月に東京専門学校邦語政治科第二学年へ編入学、一八九六年七月の卒業後は東京日日新聞社に入社した。

一九〇一年には東京専門学校留学生としてコロンビア大学に留学して、帰国後の一九〇四年から母校の教壇に立った。一九二四



中野登美雄

年からは常務理事として高田早苗総長を補佐、一九三一年六月から逝去する一九四四年八月まで第四代総長を務めた。

総長としては、木造中心であった校舎のコンクリート化など、キャンパス整備に貢献した。

中野登美雄（一八九一年七月～一九四八年五月）

北海道札幌市出身、一九二二年早稲田大学高等予科に入学、一九一六年に大学部政治経済科を卒業。一九一八年よりシカゴ大

学・ソルボンヌ大学等に留学、一九二三年早稲田大学助教に就任した。代表的著作は『統帥権の独立』（一九三四年）。

一九四二年から塩沢昌貞の後任として政治経済学部長に就任、田中穂積総長死後の一九四四年八月に第五代総長に就任した。総長就任後は勤労働員や空襲など、戦時体制への対応を迫られた。

一九四六年一月に総長を辞職、同年一〇月公職追放となり、その後、教職に復帰することなく一九四八年五月に死去した。

〔主な展示資料〕

○青年学徒の出陣に臨み（草稿）／〔田中穂積〕（大島正一関係資料No.4）

「昭和十八年十月三十日放送」と書き込みあり。

○中野登美雄宛永井柳太郎書簡／（一九四四年）九月一九日（二〇〇九年廣野登志氏寄贈資料No.16）

中野登美雄の総長就任に対して、戦時下の難局における決断を称賛する書簡。

○予審終結決定書（津田事件関係）／一九四一年三月二七日（二〇二一年木村郁子氏寄贈資料No.3-3）

○昭和十五年度学校教練査閲受閲計画（賀陽宮教練視察関係）／第一早稲田高等学院、一九四〇年十二月（三号館旧蔵資料34-37）

○昭和十三年度 特設東亜専攻科 募集要項／早稲田大学（三号館旧蔵資料11-5）

一九三八年四月、「東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」という理念を掲げて、特設東亜専攻科が設置された。

○郭明昆・呉主恵共編『特設東亜専攻科支那語教材』（三号館旧蔵資料11-11）

○早稲田大学報国隊第十二部隊編成表（第二早稲田高等学院）／一九四一年八月（大学史編纂所旧蔵資料・学院3）

学生の勤労働員を組織化するため、早稲田大学報国隊が結成された。以後、勤労働員が本格化するとともに、教室での授業時間が奪われていった。

III 戦時体制と学生生活

総力戦体制下において、学生生活も戦時色の強いものとなった。一九三三年七月には学部学生に対して初めての野外教練が実施された。さらに、一九四〇年一〇月には、「国是即応、体力練磨、集団訓練」を綱領として掲げた学徒錬成部の新設が決定、一九四一年九月には久留米錬成道場が完成するなど、学徒錬成部の活動が本格化した。ことで、学校教育は形骸化し、学生生活も軍事一色となっていった。

一九四一年八月には勤労働員の組織化を目的とした早稲田大学報国隊が結成され、各地への勤労働員が本格化した。学生生活は、教室で学ぶことよりも、軍事工場での労働作業が中心を占めるようになる。

しかし、学徒勤労働員が順調に進んだわけではない。「鐘淵デーゼル第一工場ノ言フ所」(展示資料)に書かれた「遅刻、欠勤、早引ガ多スギ、他ノ工員ニ悪イ影響ヲ及ボス」や「段々人数モ減ツテ行クシ働イテモラヘヌ人ノ為ニ宿舍ヲコシラヘルノハ如何カト思フ」という記録からは、勤労働員に対する学生の不満や、受入側の戸惑いを読み取ることができる。

また、一九三九年に初めて正規学生として入学した女子学生も、戦時体制下において同級生たちを戦場に送り出す役割を担わされた。

そのような状況下においても、日常的な学生生活は確かに存在した。友と語り合い、レポートや卒業論文の制作に埋没するといった一見平穏な日常である。しかし、その日常が戦争や死と常に背中合わせであったことを忘れてはならない。

〔主な展示資料〕

○日米学生会議関係書類／早稲田大学教務部、一九三二年～(国際交流センター資料No.2)

○受講ノート 配給論／川村芳太郎、一九四一年～一九四三年(川村芳太郎早稲田大学関係資料No.16)

川村芳太郎は一九二二年山形県鶴岡市出身、一九四一年四月に専門部商科に入学。一九四三年九月に繰り上げ卒業となり、同年一二月に入営した。一九四五年五月一日、沖縄戦で死去。

○卒業論文 P.R.B.における DANTE GABRIEL ROSSETTI／楊國喜、一九四一年三月(青山学院女子短期大学図書館)



学徒錬成部（1941年～1943年）

寄贈資料No.3)

○卒業論文 ジョルジュ・サンド研究 その生涯／敷江讓治、一九四二年九月頃（青山学院女子短期大学図書館寄贈資料No.5）

○〔夏季休暇中の課題〕／早稲田大学高等師範部長・原田實、一九三九年七月三日（福田常雄氏寄贈資料24）

○答辞／第一早稲田高等学院第二十三回修了生総代・正木道雄、一九四四年九月三日（第一早稲田高等学院関係資料（本庄設置）C—

16）

○昭和九年度 早稲田大学学生証／姜箕錫、一九三四年（姜箕錫関係資料7）

姜箕錫（カン・キスク）は一九〇八年生まれ、一九三六年に早稲田大学政治経済学部を卒業。戦後は大韓民国政府企画処物価計画局長、同復興部調整局長などを歴任した。二〇〇〇年に死去。

○鐘淵デーゼル第一工場ノ言フ所【パネル展示】／一九四四年頃カ（鈴木和一郎氏寄贈旧制第二早稲田高等学院関係資料No.53）

学徒動員を受け入れた側の不満や要望を書きとめた文書。学生の厭戦意識、労働に対する非協力的態度や、受入工場の学生に対する不満などを伺うことができる。

○昭和十六年度野宮（富士瀧ヶ原）教育計画表（第二第三学年）／早稲田大学高等師範部、一九四一年九月（福田常雄氏寄贈資料30）

○〔卒業証書〕／専門部商科第一種 川村芳太郎、一九四三年九月二五日（川村芳太郎早稲田大学関係資料No.50）

○朝鮮人台湾人特別志願兵制度ニヨリ志願セザリシ学生生徒ノ取扱ニ関スル件／文部省専門教育局長、一九四三年一月三日（早稲田大学本部書類（続） 6—7—256）

コラム 植民地出身学生と戦争

戦時下、植民地である台湾・朝鮮半島は徴兵令の対象外であった。一九四三年一〇月に学生の徴兵猶予が解除され、多くの日本人学生は戦地へと送られた。植民地出身学生に対しても、一九四三年一〇月三〇日「朝鮮人台湾人学生生徒ニ関スル件」が通牒され、志願兵として戦場に動員された。しかし、志願というのは名目のみで、実際には志願を拒否する学生に対しては、大学が自主的に休学・退学させることが指示された。本来徴兵の対象ではない植民地出身学生を、実質的な強制によって戦争へ動員したのであり、植民地支配の本質を示すものである。

IV 敗戦と混乱

一 戦時下の学苑と学生

一九四三年一〇月以降、多くの学生は戦地に動員され、学苑キャンパスは閑散とした状態となった。授業もほとん

ど行われず、残留学生の多くも勤労働員によって学習機会を奪われた。

一九四四年一月に東京は最初の大規模な空襲を受け、以後は残留学生にとつても戦争はより身近なものとなった。教職員が中心であった特設防護団も、一九四四年二月には「空襲必至の緊迫した情勢に対処し、実践的に学苑の自衛化を図るため」に残留学生を組み込んだ組織に改編された。一九四五年三月には、理工系の残留学生を中心とした学徒消防隊が結成され、各地の消防署に配属された。

空襲による大学・学生の被害も甚大であった。一九四五年五月二五日の大空襲によって大学キャンパスは三分の一を焼失した。恩賜記念館・第一高等学院校舎などが全焼、大隈会館（旧大隈邸）もこの空襲で焼失した。また、一九四五年三月一〇日のいわゆる東京大空襲では学徒消防隊の学生七名が犠牲に、八月七日には学徒勤労働員で豊川海軍工廠に動員されていた専門部政治経済学科学生を中心とした一五名の学生が空襲の犠牲となった。

出陣学徒として戦地に赴いた学生のみならず、残留学生にとつても戦争と「死」は、現実的な存在であった。

〔主な展示資料〕

○奉護日誌／早稲田大学学徒隊軽井沢基地設営班長・中村彌三次、一九四五年七月一六日～九月八日（三号館旧蔵資料36―20）

○長尾明宛池田恒彦書簡／一九四五年八月七日（二〇〇八年外岡明氏寄贈資料4）

健民修練所の長尾明氏に送られた書簡。特に高見豊教授の解析幾何学の授業に関して、その内容や進捗状況を詳細に知らせている。また、知多半島への勤労働員が決定したこと、八月一五日現地集合や現地の状況などが記載述されている。

二 敗戦と学苑の混乱

一九四五年八月一五日の敗戦によって、大学や学生も戦争体制から脱却することとなった。九月には授業が再開され、戦地からも多くの学生が学苑に戻った。食糧物資の絶対的な不足と極度のインフレーションによって、学生たちも生活難に苦しむこととなったが、「戦争が終って学問の場所に戻ってきたという切実な喜び」（戸川雄次郎の回顧）を感じながら、平常を取り戻すべく歩みはじめた。



中野登美雄総長と学徒隊（1945年7月頃）

○腕章 早稲田大学特設防護団 警備班・消防班・防毒班副班長（二〇

〇七年佐々木哲雄氏寄贈資料No.4・5、大学史編纂所旧蔵資料箱No.15）

○警戒警報下ノ授業ニ関スル件／総長、一九四五年三月五日（早稲田大学本部書類5—65—143）

○手帳／小林巽、一九四五年（二〇〇八年小林巽氏寄贈資料1）

○〔応召・入営中教職員のリスト〕【パネル展示】／早稲田大学総長中野登美雄、一九四五年四月一五日（早稲田大学本部書類（統）6—18A—

407）

70）〔早稲田大学キャンパス罹災図面〕（早稲田大学本部書類（統）6—19—

しかし、大学が自らの戦時責任に関して、明確な「清算」を行うことはなかった。学生は、このような大学の「無責任」や「手のひらを返したような対応」に対して敏感に反応し、様々なかたちで声を挙げた。

一方、大学はGHQ／SCAP（連合国最高司令官総司令部）やCIE（民間情報教育局）の矢継ぎ早な「教育改革」への対応を迫られた。大学関係者も戦争責任を追究され、公職追放や適格審査の対象となることもあった。敗戦後の混乱のなか、大学は戦後の新しい教育システム（新制大学）への対応という新たな課題に直面していくこととなった。

高田馬場の駅を出ると、復員服を着た学生の姿が道にあふれていた。それは敗戦にうちひしがれた姿ではなかった。再び学園にかえって勉強できるんだ、という希望に胸をふくらました、あたかも新入生のような新鮮な顔でいっぱいだった。以前はあまり口をきいたことのないもの同志でも、お互に手を取りあって、「お前、生きていたのか」などというあたりしした。あのいまわしい軍隊の桎梏から解放されて、学園に帰ったという安堵感やら、学問に対する希望やらがいきまじって、大きなウズをまいているようにさえ思われた。

林幹弥「友の独り言」『早稲田学報』七七三号

コラム 幻の総長―津田左右吉―

敗戦後、大学関係者も戦争責任を問われ、公職追放処分の対象となった。中野登美雄総長もその一人であり、一九四六年一月に自ら辞職を願ひ出た。

後任の総長選出は難航した。一九四六年五月発効の新校規では、選挙人による総長選挙制が導入された。同年六月一〇日に総長選挙人会が開催され、津田左右吉が新総長に選出された。しかし、大学の要請を津田は固辞し



「津田博士遂に辞退 白紙に還った総長選挙」
 (『早稲田大学新聞』、1946年7月)

た。津田は一九四〇年にいわゆる「津田事件」によって学苑を追われた人である。大学は津田の疎開先である岩手県平泉に赴き説得を行ったが、津田を翻意させることはできなかった。津田総長は幻に終わった

再び総長選挙人会が開かれ、第六代総長には島田孝一が選出された。戦時下にあつて津田を守ることができな

かった大学が、敗戦後に津田を次期総長に選出するという一連の行動は、当該期における大学の混乱を象徴するものともいえる。

「主な展示資料」

○外国及外地引揚邦人子弟ノ転校ニ関スル件／早稲田大学総長・中野登美雄、一九四五年一月二八日（早稲田大学本部書類（続）6

—19—227

○学生身上調査報告控 戦没者調査書・処罰者調査書・海外引揚学生調査書／早稲田大学第一高等学院、一九四六年九月—一九四八年九月（第一早稲田高等学院関係資料（本庄設置）C—1）

○教職員及学生生徒の政治運動及選挙運動に関する件／一九四六年一月一七日（早稲田大学本部書類5—67—361）

学校内での学生・教員の政治演説、及び政治活動（特定政党・候補者に関する応援活動、文書配布活動）を禁止する内容。

○時局ノ変転ニ伴フ学校教育ニ関スル件【パネル展示】／一九四五年八月二八日（早稲田大学本部書類（続） 6—17—51）

○昭和二十年度 適格審査関係書類／早稲田大学教育適格審査会、一九四五年—一九四七年（三号館旧蔵資料37—49）

○教員ノ解職並ニ再任用ニ関スル件（京口元吉）／一九四六年二月二日（早稲田大学本部書類（続） 6—19—261）

一九四一年三月、文学部教授であった京口元吉は、警視庁より講義内容が自由主義的であると指弾を受け、辞職した。資料には「表面ハ一身上ノ都合ニ依リ退職セルモノナルモ（略）引責解職シタルモノナリ」と記載されている。

○佐倉設営経過報告／臨時佐倉設営部々長・内藤多伸、一九四六年九月二九日（早稲田大学本部書類（続2） 79）

コラム 佐倉キャンパス移転計画

授業再開に伴う校舎不足を解消するために浮上したのが、高等学院の千葉県佐倉町（当時）への移転案である。佐倉連隊跡地と部隊兵舎を再利用しようとするものであり、一九四五年一〇月には、内藤多伸・村井資長らが現地視察と佐倉町との交渉を行なった。

同年一二月には、臨時佐倉設営部（部長内藤多伸）が設置され、キャンパス移転計画が本格化した。しかし、学内の反対意見や、佐倉町との交渉不調などもあり、一九四六年九月に計画の断念が決議された。

三 占領下の学生生活

一九四六年以降、学生生活は徐々にではあるが、平常へと回帰していった。一九四五年一月には早慶野球戦が



第一早稲田高等学院 S 組（1948年2月）

復活し（現役・OBの合同）、同年秋には学生雄弁会と弁論部が結成された（一九四六年六月に雄弁会へ合併）。一九四六年一月には学生自治委員会も結成され、学生大会が開催された。

学生たちの「自主権確立」の声は大きくなり、一九四六年五月二九日には第三回学生大会が開催され、一五〇〇人余の学生が大隈講堂前に集まった。学生自治委員会の承認と教授学生協議会の設立の要求、及び決議文を総長代理に手交し、大学も五月三一日に学生自治委員会を承認した。

また、日本国憲法発布を控えた一九四六年一〇月には、新憲法講座が開催され（一般にも公開）、蛭山正道「新憲法と議会政治」などが講演された。一月一三日には、新憲法公布式典が大隈講堂で挙行され、島田孝一総長が「憲法的良心を以て臨め」と題した講演を行うなど、大学も民主国家に相応しい「装い」を整えていった。

一方で、植民地出身学生は宗主国日本の敗戦によって、一層不安定な立場となった。彼らは「祖国」が植民地支配からの解放と米ソ対立によって混乱するなか、GHQ／SCAPの東アジア戦略と日本政府との間で翻弄されることとなった。

〔主な展示資料〕

○外国外地出身学生数調【パネル展示】／早稲田大学、一九四五年一二

月一九日（早稲田大学本部書類（続） 6—19—155）

- 運動会プログラム／第一早稲田高等学院、(一九四七年) 一月八日 (二〇〇八年小林巽氏寄贈資料21)
- 講義ノート 上坂西三、貿易実務、／石橋直幸、一九四八年頃 (石橋直幸早稲田関係資料6)
- 声明 (藤間生大出講停止に関する抗議文) ／文学部史学科学生全員、一九四七年八月一日 (三号館旧蔵資料39―38)
- 昭和二十三年度 擬国会／早稲田大学稲政学友会、一九四八年 (二〇〇八年山城正道氏寄贈資料2)
- 学校劇研究発表会【パネル展示】／早稲田大学文学部教育学会、一九四七年二月二日 (二〇〇三年大槻綾子氏寄贈資料)

コラム 大山郁夫と早稲田

大山郁夫は一九〇五年に東京専門学校を卒業し、一九一五年から母校早稲田大学の教壇に立った。一九一七年の早稲田騒動では恩賜館プロテスタントの一員として高田総長と対立して、騒動後に学苑を去った。一九二一年に大学に復帰したものの、一九二七年の労働農民党委員長就任をきっかけとする大山事件で解職となった。一九三二年にはアメリカに亡命し、敗戦後まで日本に戻ることはなかった。

日本の敗戦によって大山の境遇は一変した。学苑では一九四五年二月、政治経済学部教授会が大山の教授復帰を決議し、翌一九四六年二月には学生自治委員会有志による大山郁夫婦校促進準備会が発足した。大山の学苑復帰を願う声は、教員・学生の垣根をこえた大きな動きとなった。一九四六年の総長選挙の際には、候補者として大山の名前が挙がっている。

一九四七年一〇月、大山は一五年振りに帰国した。大学では一〇月二八日に歓迎大会が開催され、翌一九四八年五月には再び母校の教壇に立つこととなった。

エピソード

一九四九年、新制早稲田大学が誕生し、新日本建設のスローガンに相応しい教育機関たるべきことが、大学には要請された。しかし、民主国家建設の道程は平坦ではなく、冷戦体制のなか、新日本の本質があらためて問われることとなった。こうしたなか、学問の自由や大学の自治を要求する学生たちの声が、学苑キャンパスを埋めつくす時代を迎えることとなる。

※本稿に掲載した資料は全て早稲田大学史資料センター所蔵。また、紹介・掲載した写真や資料は、展示資料の一部です。

写真で見る十五年戦争下の学生たち

一九三〇年代から占領期にかけての早稲田大学に関する写真資料はほとんど現存しない。卒業アルバムも一九四〇年前後までは現存するものの、その後は一九五〇年まで数冊しか確認することができない。大学関係の写真資料には一九四〇年前後から一九五〇年までの約一〇年間の空白が存在する。

大学史資料センターが所蔵する卒業アルバム以外の写真資料から、十五年戦争期から敗戦後の大学キャンパス、学生の日常的風景に関わる貴重な写真をパネルで紹介する。



早大劇芸術研究会 於大隈講堂（1932年）



錬成行進の小休止（1943年頃）



戸塚球場（1943年頃）